

Title	愛着スタイルとしての関係不安と過剰適応行動が恋愛関係における親和不満感情に及ぼす影響
Author(s)	鈴木, 伸哉; 五十嵐, 祐; 吉田, 俊和
Citation	対人社会心理学研究. 15 p.63-p.69
Issue Date	2015
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54438
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

愛着スタイルとしての関係不安と過剰適応行動が

恋愛関係における親和不満感情に及ぼす影響¹⁾

鈴木伸哉(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

五十嵐祐(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

吉田俊和(岐阜聖徳学園大学教育学部)

愛着スタイルとしての関係不安は、恋愛関係に否定的な影響を及ぼすことが示されているものの、その詳細なプロセスは未だ明らかではない。本研究では、関係の維持を目的として内的な欲求を抑圧し、外的な期待や要求に応えようとする過剰適応行動が、関係不安によって高められ、さらに恋愛関係における親和不満感情に影響を及ぼすと予測し、検討を行った。恋人のいる102名の大学生の回答を分析したところ、この予測は支持された。この結果は、関係不安が親和不満感情を高めるプロセスが、関係を維持するために行う過剰適応行動に起因する可能性を示唆している。

キーワード:成人の愛着、関係不安、過剰適応行動、親和不満感情、恋愛関係

問題と目的

個人間の相互作用に基づく親密な関係は、ソーシャル・サポートを交換する場として機能する。親密な関係がウェルビーイングと関連することは、多くの先行研究で指摘されてきた。たとえば、親密な対人関係の良好さが幸福感を高めること(Dush & Amato, 2005)や、それとは対照的に、孤独な状態が抑うつにつながること(Cacioppo, Hughes, Waite, Hawkley, & Thisted, 2006)などが挙げられる。これらの知見は、社会関係資本の観点から理解することが可能である。Lin(2002)によると、社会関係資本とは社会的ネットワークに埋め込まれた資源である。対人関係を構築し、維持することで、個人は自身が所有していない資源を利用することが可能になる。つまり、対人関係を通じて個人はさまざまな資源にアクセスし、ウェルビーイングや幸福を高めているのである。

先行研究では、自己についてのネガティブな信念や期待として定義される、愛着スタイルとしての関係不安が高い人々が、親密な関係をうまく築きにくいことが示されてきた(金政, 2009, 2010)。上述のように、対人関係はさまざまな資源にアクセスできる可能性を高めるため、個人にとって、親密な関係の崩壊を防ぐことは重要であり、何がそのような関係の崩壊をもたらすかを検討することは、社会的にも意義があると考えられる。そこで本研究では、愛着スタイルとしての関係不安の影響に注目し、関係不安の高い個人が親密な関係の維持に失敗するプロセスを、不適切な行動傾向との関連から検討する。

愛着は、乳幼児期における母子関係の情緒的なつながりや絆を指す(Bowlby, 1969)。愛着を基盤として形成される内的作業モデルは、生涯にわたって個人の認知

や行動方略に影響を及ぼし続ける(Bowlby, 1980)。乳幼児―養育者の関係と、青年・成人期の恋愛・夫婦関係の共通点として、成人の愛着理論では、近接性の探索、分離苦悩、安全な避難所、安全基地の4つの側面が見出されている(Hazan & Shaver, 1987; Shaver & Hazan, 1988)。

成人の愛着スタイルの分類は、アダルト・アタッチメント・インタビュー(Main, Kaplan, & Cassidy, 1985)による3類型(安定型・アンビヴァレント型・回避型)や、Bartholomew & Horowitz(1991)による4類型(安定型、とらわれ型、おそれ・回避型、拒絶・回避型)などがある。これらは、乳幼児を対象としたストレンジ・シチュエーション法(Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)で分類される3類型と対比される。

Brennan, Clark, & Shaver(1998)は、成人の愛着スタイルを測定するために、親密な対人関係体験尺度(ECR; Experiences in Close Relationships inventory)を作成した。ECRは、関係不安と親密性回避という直交する2つの次元で構成される。関係不安とは、自己についてのネガティブな信念や期待(自己モデル)であり、親密さへの非常に強い欲求や、親密さへの欲求が満たされないこと、すなわち相手から受容されないことに対する不安を指す。一方、親密性回避とは、他者についてのネガティブな信念や期待(他者モデル)であり、親密になることに対する抵抗と、心理的独立性を維持しようとする欲求を指す。従来、これらの2次元に基づいて愛着スタイルを分類する場合には、Bartholomew & Horowitz(1991)の提唱した4類型が採用されてきた。一方、近年では関係不安、親密性回避のそれぞれに注目した研究も見られ

る(e.g., Feeney, 1995, 1999; 金政, 2009, 2010)。ECRは十分な信頼性や構成概念妥当性、予測的妥当性を有しており(Shaver & Mikulincer, 2002)、近年、愛着スタイルを測定するための尺度として最も広く用いられている。

関係不安や親密性回避が高い個人にとって、親密な二者関係を形成・維持することは困難である。たとえば、関係不安と親密性回避は、特定の出来事を想像せずに回答を求めた場合、恋愛関係や夫婦関係において感じる否定的な感情や関係満足感と関連を示す(Feeney, 1995, 1999)。また、関係不安の高い個人は、否定的な感情を抱きやすく、パートナーにも否定的な感情を抱かせる(金政, 2009, 2010)。その理由としては、不安定な愛着スタイルによって個人の認知が歪むことが挙げられる。関係不安や親密性回避の高さは、原因帰属の偏りと関連する(Sümer & Cozzarelli, 2004; Collins, Ford, Guichard, & Allard, 2006)。また、葛藤場面においても、不安定な愛着スタイルをもつ個人は、非建設的な葛藤対処方略を採用し、安定型の愛着スタイルをもつ個人は建設的な葛藤対処方略を採用する傾向がある(Levy & Davis, 1988; Simpson, Rholes, & Phillips, 1996)。

その一方で、関係不安の高い個人は、関係性を良好に保つ効果のある共同規範に基づく行動をとりやすいという指摘もある(Bartz & Lydon, 2006, 2008)。共同規範とは、お互いに見返りを求めずにパートナーのためを思って利他的な行動を行うという、関係性に関する規範である。たとえば、Bartz & Lydon(2006)は、Clark(1984)の実験パラダイムを用いて、参加者が作業効率の低い魅力的な異性を実験のパートナーとした場合、参加者とパートナーが同じ色のペンを使うことで実験者が個々の作業量を判断できない状況で、参加者がパートナーに多くの報酬を与えようとするかどうかを共同規範に基づく行動の指標としている。共同規範は親密な関係において見られ、また共同規範に基づく行動の遂行は関係満足度を高める(Clark, Lemay, Graham, Pataki, & Finkel, 2010; Clark & Mills, 1979)。

このように、関係不安の高い個人は否定的な感情を感じており、関係満足度が低い一方で、共同規範に基づく行動を遂行しやすいという、関係性を促進するような傾向も示す。この矛盾は、関係不安の高い個人が、他者からの受容を目的とした対人方略を志向している点から解釈できる。Bartz & Lydon(2008)では、関係不安の高い個人が互恵性を重視していたことから、こうした個人はパートナーの利得のみを考えて利他的な行動を行っているわけではなく、むしろ互恵的利他主義(Trivers, 1971)のように、自身に見返りがあることを期待して利他行動を行っていると考えられる。互恵性の重視は、見返りを求めない、

本来の意味での共同規範に基づく関係性とは異なる。言いかえれば、関係不安の高い個人は、パートナーから受容されることを求めて(Shaver, Schachner, & Mikulincer, 2005)、内的な欲求を抑圧し、外的な期待や要求に応えようとしていると考えられる。

こうしたふるまいは、過剰適応行動(石津・安保, 2008)と呼ばれ、教育場面などでも報告されている。恋愛関係においても、関係不安の高い個人は、自己主張の抑制や自己犠牲的な行為、パートナーに対する過剰な配慮を戦略的に行うと考えられる。また、関係不安の高い個人が共同規範に基づいた行動を遂行しているように見えるのは、パートナーから受容されるための資源の先行投資であるとも解釈できる。しかし、そもそも過剰適応行動は、自身の利益に焦点を当てた上で行われているにすぎず、パートナーとの関係性に即して行われているわけではない。したがって、関係不安の高い個人にとっては、過剰適応行動の結果としてパートナーからの受容が促進されるとは限らず、逆に、自身からパートナーへの投資量が増加したために充足感を得られず、さみしい・悲しいといった恋人への親和不満感情を高めてしまうことが予測される。

以上の議論から、本研究では関係不安と過剰適応行動、親和不満感情の関連について、関係不安が親密な二者関係における過剰適応行動を促進し、さらに過剰適応行動が親和不満感情を促進するプロセスを想定して検討を行う。また、過剰適応行動が関係不安と親和不満感情との関連を媒介する効果を持つかどうかについては、探索的に検討を行う。

方法

調査対象

2012年6月から7月にかけて、2つの大学の授業時間の一部を用いて、質問紙を大学生539名に配布した。そのうち、回答への協力が得られ、調査時点で恋人がいた大学生102名(男性23名、女性79名、平均年齢19.15歳、 $SD=.94$)を分析の対象とした。

質問紙の構成

愛着スタイル Brennan et al.(1998)が作成したECRを基に、中尾・加藤(2004)が作成した一般他者版愛着スタイル尺度(ECR-GO)を用いた。ECR-GOは、対人関係全般に対する関係不安と親密性回避を測定するための尺度である。調査協力者は、愛着スタイルにおける関係不安を測定する18項目(e.g., 「私は一人ぼっちになってしまわないかと心配する」、「私は見捨てられるのではないかと心配だ」、「私は誰かとつき合っていないと、何となく不安で不安定な気持ちになる」)に、7件法(1: まったく当てはまらない〜7: とてもよく当てはまる)で

回答するよう求められた。

恋人との交際期間 現在の恋人(パートナー)をAさんとして想起するよう教示し、交際期間(単位: 月)について回答を求めた。

親密性 IOS 尺度(Inclusion of Other in the Self scale; Aron, Aron, & Smollan, 1992)を用いて、パートナーとの親密性をもっともよく表している図の番号を選ぶよう求めた。この尺度は 7 件法で、調査協力者とパートナーがそれぞれ円で表されており、数字が大きくなるほど対象者とパートナーとの円の重なりが大きくなる。

親密な二者関係における過剰適応行動 中学生を対象とした過剰適応傾向尺度(石津・安保, 2008)、恋愛関係を対象とした動機づけに基づく自己犠牲尺度(Impett, Gable, & Peplau, 2005)、共同規範尺度(Mills, Clark, Ford, & Johnson, 2004)を参考にして、親密な二者関係における過剰適応行動尺度(17 項目)を作成し、7 件法(1: まったく当てはまらない～7: とてもよく当てはまる)で回答を求めた(Table 1)。

異性交際における否定的感情 回答時点のパートナーとの恋愛関係における否定的感情を測定するために、立脇(2009)が作成した異性交際における否定的感情尺度から、親和不満出来事に関する感情を測定する 7 項目を抜粋して用いた。立脇(2009)は、否定的な出来事を複数提示し、さらにその出来事ごとに感情を提示して、あてはまる感情すべてに○をつける多重回答形式で回答を求めている。しかし、本研究では、異性交際全般にわたって感じる否定的感情を対象としているため、具体的な出来事を提示せずに、項目を「悲しいと感ずることがある」、「つらいと感ずることがある」と改変した上で、7 件法(1: まったく当てはまらない～7: とてもよく当てはまる)で回答を求めた。

結果

過剰適応行動尺度の検討

本研究で作成した親密な二者関係における過剰適応行動尺度の因子構造を確認するために、17 項目に対して探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況(7.772、2.065、1.142、0.842、...)および解釈可能性から、1 因子構造を採用した²⁾。次に因子数を 1 に指定して最尤法による探索的因子分析を行ったところ、1 項目(「A さんとの関係を維持するために、A さんと違うことを思っているときは、いつも伝えている」)の因子負荷量が.40 未満であったため除外し、再度因子分析を行った。最終的に採用した 16 項目の因子負荷量を Table 1 に示す。クロンバックの信頼性係数は $\alpha = .928$ であり、十分な内的整合性が確認された。

次に、基準関連妥当性を確認するために、過剰適応行

動得点と、IOS 尺度得点および交際期間との相関係数を算出した(Table 2)。過剰適応行動は共同体感覚に基づかないため、IOS 尺度得点とは有意な相関を示さないことが予測される。これに対して、過剰適応行動を行うような関係性は維持が困難であることから、交際期間は過剰適応行動得点と負の相関を示すと予測される。相関分析の結果、過剰適応行動得点と IOS 尺度得点の間には、有意な相関は見られず($r = .087, p = .385$)、過剰適応行動得点と交際期間の間には、有意傾向ではあるものの負の相関が見られた($r = -.172, p = .083$)。以上のことから、過剰適応行動尺度の基準関連妥当性はある程度満たされていると考えられる。

仮説の検討

各変数の記述統計量および変数間の相関関係を Table 2 に示す。関係不安得点は過剰適応行動得点および親和不満感情得点と有意な正の相関を示した($r_s = .234 \sim .273, p_s = .006 \sim .018$)。また、過剰適応行動得点は親和不満感情と有意な正の相関を示した($r = .351, p = .000$)。

次に、関係不安が親密な二者関係における過剰適応行動を促進し、過剰適応行動が親和不満感情を促進するというプロセスの検討を行うため、構造方程式モデリングによる分析を行った(Figure 1)³⁾。その結果、関係不安は過剰適応行動に対して有意な正の効果を示し($\gamma = .273, p = .005$)、過剰適応行動は親和不満感情に対して有意な正の効果($\beta = .311, p = .002$)を示した。

また、関係不安から親和不満感情への直接効果($\gamma = .234, p = .018$)は、過剰適応行動を媒介変数としてモデルに含めた場合、有意ではなくなった($\gamma = .149, p = .127$)。さらに、Sobel test による過剰適応行動の媒介効果の検討を行ったところ、有意な効果が示された($z = 2.139, p = .032$)。したがって、パートナーへの親和不満感情は、関係不安に伴う過剰適応行動を通じて高まっている可能性が示された。

考察

本研究の目的は、関係不安がもたらす親密な二者関係の悪化プロセスを、恋愛関係における過剰適応行動との関連から検討することであった。構造方程式モデリングによる分析の結果、関係不安は過剰適応行動を促進し、また過剰適応行動は親和不満感情を促進していた。さらに、過剰適応行動は、関係不安と親和不満感情との関連を媒介していた。これらの結果は、関係不安の高い個人が、不適切な関係維持方略としての過剰適応行動をとりやすくなり、その結果、パートナーに親和不満感情を抱きやすくなる可能性を示唆するものである。関係不安が過剰適応行動を生起させるプロセスは、2 つの異なる観点から解釈することが可能である。第一に、関係不安

Table 1 親密な二者関係における過剰適応行動尺度

項目(数字は調査実施時の項目番号)	F1	h^2	M	SD
13 Aさんから好かれるために、Aさんからの要求に常に敏感である。	.767	.589	3.314	1.489
17 Aさんに気に入られるために、Aさんの欲求を満たすことが最優先である。	.747	.558	3.216	1.390
9 Aさんに好かれたくて、自分が困っても、Aさんのために何かしてあげることがほとんどである。	.747	.558	3.157	1.461
3 Aさんに気に入られるために、私はAさんにかなり尽くしている。	.722	.522	3.569	1.493
11 Aさんに好かれたくて、Aさんのためになるなら、やりたくないことでも無理をしてやるのが非常に多い。	.713	.509	2.755	1.518
7 Aさんに気に入られるために、「自分さえ我慢すればいい」といつも思っている。	.699	.489	3.245	1.650
10 Aさんとの関係維持のためなら、時間やお金はまったく惜しまない。	.694	.481	3.333	1.582
2 Aさんに気に入られるためにAさんがしてほしいことは何かと常に考えている。	.674	.454	3.912	1.456
14 Aさんから気に入られたくて、Aさんの幸せのために行動する。	.661	.437	4.147	1.531
8 Aさんに気に入られるために、心に思っていることをAさんにほとんど伝えられない。	.642	.413	2.588	1.352
12 Aさんによく思われたいと思い、まったく自分の意見を通そうとしない。	.639	.408	2.402	1.269
6 Aさんに好かれるためなら、Aさんのためにどんな犠牲も払うことができる。	.635	.404	2.775	1.515
1 Aさんに気に入られるために、Aさんの顔色や様子を常に気にしている。	.629	.395	3.569	1.493
16 Aさんとの関係がぎくしゃくしないようにするために、常に自分の気持ちを抑えてしまう。	.616	.379	2.824	1.431
15 Aさんとの関係を維持するために、常にAさんに喜んでもらえること考えている。	.597	.357	4.608	1.380
4 Aさんとの関係を維持するために、Aさんの前では感情を抑えてしまっている。	.531	.282	3.020	1.548
5 剰余項目:Aさんとの関係を維持するために、Aさんと違うことを思っているときは、いつも伝えている。			3.461	1.433
因子寄与 7.236				

注 1) $n = 102$, 最尤法

の高い個人による過剰適応行動は、葛藤場面など、親密な関係への明らかな脅威が生じている状況で顕在化する可能性がある。愛着スタイルと行動反応との関連を検討した先行研究では、葛藤のように否定的な感情が喚起される場面を用いることが多く、またストレンジ・シチュエーション法などを用いた初期の愛着研究においても、否定的な感情が喚起された状況において、愛着の類型やスタイルに特有の行動反応がみられた。これらのことから、関係不安に基づく過剰適応行動は、特に否定的な感情が喚起される場面において生起しやすいと考えられる。

第二に、関係不安の高い個人は、認知の歪みによって、日常的なパートナーとの関係に葛藤を感じやすく

(Campbell, Simpson, Boldry, & Kashy, 2005)、それを脅威と認知する結果、過剰適応行動をとりやすくなる可能性がある。一般的にはニュートラル、あるいはポジティブな出来事であっても、関係不安の高い個人にとっては、それがパートナーとの関係を脅かすような出来事であると認知される可能性は十分に考えられる。たとえば、恋人と食事に行き、自分とパートナーの食べたいものが異なっていた場合、あるいは、自分は旅行の計画を綿密に立てたいものの、相手は行き当たりばったりの旅行をしたいと考えている場合などの、日常的な意見の食い違いでさえも、関係不安の高い個人は関係性への脅威と考えるかもしれない。

Table 2 各変数の記述統計量および相関係数

	記述統計量			相関係数			
	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	1	2	3	4
1. 交際期間(月)	16.422	16.548					
2. IOS	4.725	1.642		.116			
3. 関係不安	3.595	0.833	.886	.190 [†]	.099		
4. 過剰適応行動	3.277	1.024	.928	-.172 [†]	.087	.273 ^{**}	
5. 親和不満感情	3.850	1.169	.782	.145	-.229 [*]	.234 [*]	.351 ^{**}

注 1) $n=102$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

注 2) IOS: Inclusion of Other in the Self scale

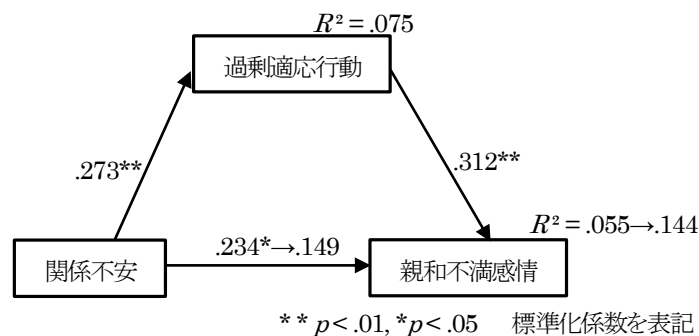


Figure 1 関係不安が過剰適応行動を媒介して親和不満感情に及ぼす影響(飽和モデル)

その一方で、本研究で作成した過剰適応行動尺度の得点はIOS尺度得点と有意な相関関係を示さなかった。このことは、過剰適応行動と共同規範に基づく行動を区別する上で重要な意味を持つ。共同規範が採用されるのは、自己が拡張され、パートナーを自己に取り込んでいる場合である(Aron, Aron, & Norman, 2002)。これに対して、過剰適応行動は、パートナーから将来的な受容を得ることを目的とした行動である。過剰適応行動は、関係の改善を期待して行われるにもかかわらず、実際には不適切な行動レパトリーを含んでいるため、将来的な不適応を引き起こしてしまうのである。

また、過剰適応行動得点とパートナーとの交際期間は、負の相関関係を示していたものの、その関連は有意傾向にとどまっていた。これは、調査対象者が大学生に限られており、交際期間の平均が約16ヶ月と比較的に短いことに起因すると考えられる。過剰適応行動は親和不満感情を高めるため、関係不安が高く、過剰適応行動を行う個人は、特定のパートナーとの恋愛関係の継続が困難となる可能性が高い。一方、関係不安が低い個人は、交際期間にかかわらず過剰適応行動をとりにくい。今後は、社会人や夫婦など、パートナーとの交際期間の分散がより大きいことが予測されるサンプルを対象に、検証を行うことが必要であろう。

本研究の意義

本研究の意義は、過剰適応行動の生起を抑制することで、関係不安の高い個人であっても、パートナーへの親和不満感情を高めずにすむ可能性を示した点にある。先行研究のモデル(金政, 2009, 2010)では、関係不安が否定的感情の直接的な説明変数として扱われており、否定的感情の喚起を抑止するには、愛着スタイルの変容という困難な課題が求められていた。愛着スタイルは成人期にあっても変容可能だという指摘がある一方(Hamilton, 2000)、その持続性や一貫性は非常に強いという主張も存在する(Lewis, Feiring, & Rosenthal, 2000)。本研究の知見に基づくと、関係不安の高い個人に対して、過剰適応行動をとらないようにするための社会的スキル・トレーニングを実施することで、パートナーへの親和不満感情は抑制できると考えられる。

課題と展望

最後に、本研究の課題と今後の展望について触れる。まず、本研究では過剰適応行動尺度の予測的妥当性が確認されておらず、尺度の検証が不十分である点是否めない。また、データの収集が横断的に行われており、因果関係の検証も十分ではない。今後は縦断的に調査を行い、プロセスをより精緻に検討する必要がある。さらに、親密なパートナーとの関係は、個人と個人の結びつ

きによって成立する。したがって、パートナーの心理社会的特徴や、ペアにおける組み合わせの影響を検討することも重要である。関係不安に基づく行動反応に関しては、パートナーの愛着スタイルとの交互作用効果が存在する(Feeney, 1999)。過剰適応行動についても同様に、パートナーが受容的である場合や、過剰適応行動を行うような場合、個人は親和不満感情を感じづらくなる可能性もある。今後は、ペアデータに基づいて、ペア内の相互作用のダイナミックスをとらえる必要がある。

また、先行研究では、青年期の恋愛関係と、中年期の夫婦関係の両方で、愛着スタイルとしての関係不安と否定的感情、関係満足感との間に関連があることが報告されている(金政, 2009, 2010)。一方、本研究のサンプルは調査時点で恋人がいた大学生のみであり、恋愛関係よりも関係継続期間の長いと思われる夫婦関係においても、本研究と同様の知見が得られる保証はない。今後の研究では、夫婦関係のような長期にわたる愛着関係を対象として、検討を行うことが求められる。

対人関係を研究する目的のひとつは、個人あるいは集団の幸福をもたらすような、良好な対人関係を築くための示唆を行うことである。成人の愛着理論にもとづいた研究は数多く行われてきており、これまでに、愛着スタイルによって親密な対人関係の否定的な側面を説明できることが示されてきた。しかし、そのメカニズムに関しては未だ不明な点も多い。将来的には、不安定な愛着スタイルや、否定的な影響を及ぼすパーソナリティの統合的な理解に加え、それらの要因が影響を及ぼすプロセスや、いかにしてその影響を抑制できるのかを検討することが望まれる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Aron, A., Aron, E. N., & Norman, C. (2002). *Self-expansion model of motivation and cognition in close relationships beyond*. In G. Fletcher & M. S. Clark (Eds.), *Blackwell Handbook of Social Psychology (Vol.2): Interpersonal processes*. United Kingdom: Blackwell Publishers. pp.478-501.
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 596-612.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: a test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bartz, J. A., & Lydon, J. E. (2006). Navigating the interdependence dilemma: Attachment goals and the use of communal norms with potential close others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 77-96.
- Bartz, J. A., & Lydon, J. E. (2008). The influence of relationship-specific attachment on the use of communal norms in close relationships. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 655-663.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss, vol. 3: Loss: sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). *Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview*. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford. pp. 46-76.
- Cacioppo, J. T., Hughes, M. E., Waite, L. J., Hawkley, L. C., & Thisted, R. A. (2006). Loneliness as a specific risk factor for depressive symptoms: Cross-sectional and longitudinal analyses. *Psychology and Aging*, **21**, 140-151.
- Campbell, L., Simpson, J. A., Boldry, J., & Kashy, D. A. (2005). Perceptions of conflict and support in romantic relationships: The role of attachment anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 510-531.
- Clark, M. S. (1984). Record keeping in two types of relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 546-557.
- Clark, M. S., Lemay, E. P., Graham, S. M., Pataki, S. P., & Finkel, E. J. (2010). Ways of giving benefits in marriage: Norm use and attachment related variability. *Psychological Science*, **21**, 944-951.
- Clark, M. S., & Mills, J. (1979). Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 12-24.
- Collins, N. L., Ford, M. B., Guichard, A. C., & Allard, L. M. (2006). Working models of attachment and attribution processes in intimate relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 201-219.
- Dush, C. M. K., & Amato, P. R. (2005). Consequences of relationship status and quality for subjective well-being. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 607-627.
- Feeney, J. A. (1995). Adult attachment and emotional control. *Personal Relationships*, **2**, 143-159.
- Feeney, J. A. (1999). Issues of closeness and distance in dating relationships: Effects of sex and attachment style. *Journal of Social and Personal Relationships*, **16**, 571-590.
- Hamilton, C. E. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, **71**, 690-694.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Impett, E. A., Gable, S. L., & Peplau, L. A. (2005). Giving up and giving in: The costs and benefits of daily sacrifice in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**, 327-344.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2008). 中学生の過剰適応傾向が

- 学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, **56**, 23-31.
- 金政祐司 (2009). 青年期の母一子ども関係と恋愛関係の共通性の検討—青年期の二つの愛着関係における悲しき予言の自己成就— 社会心理学研究, **25**, 11-20.
- 金政祐司 (2010). 中年期の夫婦関係において成人の愛着スタイルが関係内での感情経験ならびに関係への評価に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **19**, 134-145.
- Levy, M. B., & Davis, K. E. (1988). Lovestyles and attachment styles compared: Their relations to each other and to various relationship characteristics. *Journal of Social and Personal Relationships*, **5**, 439-471.
- Lewis, M., Feiring, C., & Rosenthal, S. (2000). Attachment over time. *Child Development*, **71**, 707-720.
- Lin, N. (2002). *Social capital: A theory of social structure and action*. Cambridge: Cambridge University Press. (筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪 哲・土岐智賀子(訳) (2008). ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論— ミネルヴァ書房)
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, 66-104.
- Mills, J., Clark, M. S., Ford, T. E., & Johnson, M. (2004). Measurement of communal strength. *Personal Relationships*, **11**, 213-230.
- 中尾達馬・加藤和生(2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- Shaver, P. R., & Hazan, C. (1987). A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal Relationships*, **5**, 473-501.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2002). Attachment-related psychodynamics. *Attachment & Human Development*, **4**, 133-161.
- Shaver, P. R., Schachner, D. A., & Mikulincer, M. (2005). Attachment style, excessive reassurance seeking, relationship processes, and depression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 343-359.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Phillips, D. (1996). Conflict in close relationships: An attachment perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 899-914.
- Sümer, N., & Cozzarelli, C. (2004). The impact of adult attachment on partner and self-attributions and relationship quality. *Personal Relationships*, **11**, 355-371.
- 立脇洋介 (2009). 異性交際中の出来事によって生じる否定的感情 社会心理学研究, **21**, 21-31.
- Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, **46**, 35-57.

註

- 1) 本論文は第一著者が平成 24 年度に名古屋大学教育学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。調査の実施にあたり、浅野良輔先生(浜松医科大学)、中山真先生(鈴鹿短期大学)にご協力いただきました。記してお礼申し上げます。
- 2) カイザー基準や平行分析の結果からは 2 因子構造が示唆されたが、2 因子構造を採用した場合、因子間相関が.61とやや高くなるため、解釈可能性を考慮して 1 因子構造を採用した。
- 3) 交際期間や IOS 尺度得点が、過剰適応行動得点、および親和不満感情得点に及ぼす影響を統制しても、関係不安得点、過剰適応行動得点および親和不満感情得点の関連に変化はみられなかった。

The effects of attachment anxiety and over-adaptation on affiliation-dissatisfaction in romantic relationship

Shinya SUZUKI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Tasuku IGARASHI (*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Toshikazu YOSHIDA (*Department of Education, Gifu Shotoku Gakuen University*)

Although previous research has suggested that attachment anxiety has a negative impact on romantic relationships, the mechanisms underlying this effect have not been clarified. We hypothesized that attachment anxiety affects over-adaptation—defined as making efforts to curb one's needs or wants to meet the external demands or expectations for the purpose of maintaining one's romantic relationship—which in turn affects affiliation-dissatisfaction in a romantic relationship. Analysis of data from 102 undergraduates who reported having a romantic partner supported our hypotheses. Results suggest that over-adaptation for the sake of relationship maintenance results in attachment anxiety, which in turn increases affiliation-dissatisfaction.

Keywords: adult attachment, attachment anxiety, over-adaptation, affiliation-dissatisfaction, romantic relationship.